

## 2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 6章 13～21節

説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

2016年2月7日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 17章 15～22節

説教：ヨルダン川を渡るダビデ

1 荒野にいるダビデに知らせるために

1) フシャイ

あるときダビデの息子であるアブシャロムは、イスラエルの王になることを国中に宣言し、宮殿のあるエルサレムに向かいます。その知らせを聞いたダビデは急いで宮殿を離れ、荒野に脱出をはかります。部下たちは次々とダビデを見捨て、敵の側に寝返っていく状態です。そんな大混乱の中にあっても、なおもダビデに忠誠を誓う者たちがいました。それが今日の箇所に出て来る人たちです。

まずフシャイ。彼はダビデの友と呼ばれた人で、ダビデと最後まで行動を共にするつもりで駆けつけてくるのですが、ダビデは心を痛めてこの申し出を一旦は辞退します。しかしフシャイがどうしてもと言って聞かない。そこでダビデは彼に一つの使命を託すのです。「あなたはエルサレムに戻り、アブシャロムのしもべとなりなさい。アブシャロムは私を倒すために作戦を立てるはずだから、そのときあなたが大きな役割を果たしなさい。」

そのことばを受けて、フシャイはエルサレムに戻り、アブシャロムのしもべとなります。やがて、ダビデが予想したとおり、アブシャロムは父ダビデを殺害するための作戦会議が開きます。そのときフシャイは、イスラエ

ルの全精力を傾けて、徹底的に追いつめるべきであると提案します。アブシャロムはこの提案を受け入れ、即座に作戦計画を実行を命じます。それが先週までのあらすじです。

問題はここからです。ダビデはまだエルサレムからさほど遠くないところに身を隠しています。このまま作戦が実行されれば、ダビデは見つけ出され、殺されるでしょう。急いでこの情報をダビデに知らせ、遠くに逃げるように伝えなければなりません。フシャイが直接ダビデのところへ走る訳にはいきません。そんなことをしたらダビデの居場所を教えるようなものです。そこで、今のことばでいえば「地下組織」を使って届けることにします。ここに出て来る人たちは全員、地下組織のメンバーです。

2) ツアドクとエブヤタル、彼らの息子ヨナタンとアヒマアツ

まず15節に登場する祭司ツアドクとエブヤタル。このふたりは、すでに15章のところで出てきていました。ダビデがエルサレムを脱出するときのことです。彼は最初、神の契約の箱もいっしょに持って行こうと考え、このふたりに命じて箱をかつがせました。しかし、しばらく時間が経つうちにじょじょに心が刺されていきました。どうして契約の箱を持ち出そうと考えたのかです。最初は、こうするのは神のためである信じていたつもりでした。でも本当は違ったのです。契約の箱があれば神が自分を守ってくださるので

はないか、そのような自分勝手な動機から持ち出していたのです。

そのことに気がついたダビデは、契約の箱をエルサレムに戻す決心をしました。箱をかっついて来たツアドクとエブヤタルに、エルサレムへ戻り、そのまま町にとどまりなさいと指示します。そして重要な情報をキャッチしたらその情報をダビデに伝える。そのような役割が与えられます。

そのことが今日の箇所につながっています。もしあのときダビデが契約の箱を戻さなかったなら、自分の動機をさぐられたときに、罪に気がつかなかったら、今日の箇所はなかったはずで、彼はおそらく殺されていたでしょう。ダビデと民たちが救われていくとき、まずダビデ自身が罪を示されていたことに心を留めたいと思います。

さて、ふたりはフシャイから重要な情報を託されましたが、祭司という職業柄、変な動きをすればすぐに怪しまれます。そこで人目につかずにもっと自由に動ける者が必要です。それがヨナタンとアヒマアツです。このふたりはツアドクとエブヤタルのそれぞれの息子でまだ若い。血がつながっていますからいざというときに信頼ができます。

フシャイからの伝言は、まず祭司ツアドクとエブヤタル、次に女奴隷に手渡され、町の外で待機していたヨナタンとアヒマアツに伝わります。途中、敵のスパイに感づかれてしまうのですが、機転を利かしたひとりの主婦のおかげで危機一髪逃げ延びることができました。多くの人たちの信仰と協力のおかげで、フシャイからの伝言は無事にダビデの元の届けられます。

## 2 ダビデ

### 1) フシャイからの伝言

その伝言の内容が16節にあります。「今夜は荒野の草原で夜を過ごしてはいけません。ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部に災いが降りかかるでしょう。」

「あちら」とは、ヨルダン川の向こう側のことです。アブシャロムはすぐにでも軍隊を集めてダビデを追ってくる手はずになっています。ぐずぐずしている暇はありません。明日の日の出を待ってから行動しては手遅れです。すぐに出発なさいという伝言です。

### 2) 真夜中にヨルダン川を渡る

ダビデが渡ったと思われる地点の川幅は、豊平川のように広くはありません。季節にもよるでしょうが、健康な大人であれば川を渡るのはそれほど難しいことではなかったでしょう。でも中には小さな子どもたちがいたでしょう。女性もいれば老人もいたはずで、人だけではない。家畜も連れていきます。全員を無事に向こう岸に渡らせるためには、時間をかけてそれなりの準備をする必要があります。けれども今はそんな余裕はありません。真っ暗な中を今すぐ渡らなければならない。朝を待てません。犠牲者が出るかもしれません。それでも前に進むしかありません。

幸いにして夜明けまでに全員無事に渡りきることができました。おそらく奇蹟と言っているでしょう。

## 3 ともにいてくださるイエス・キリスト

### 1) 川を渡る信仰者たち

読んでいてはらはらどきどきする場面です。

す。でも聖書は単なるサスペンス小説ではありません。ダビデの姿をとおして、神とはどのような方であるかを聖書は教えようとしています。どんな神の姿ここにあるのでしょうか。

16 節のフシャイのことばが手がかりになります。「ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、王をはじめ、いっしょにいる民全部にわざわいが降りかかるでしょう。」

フシャイは二つのことを言っています。まず一つ目。救われるためには、ぜひあちらへ渡って行かなければならない。そして二つ目。フシャイは王ひとりだけのことではなく、民たちが王といっしょにいると言っています。この二つのことに目を留めます。

聖書には、川を渡るということに関してしばしば印象的な場面が出てきます。たとえばヤコブという人がいます。彼はけんか別れた兄のエサウと再会しようとしてヤボクの渡しまでやってきます。家族を先に渡らせるのですが、兄が仕返しをするだろうと考えると自分は怖くてそこを渡れません。とうとう夜がやってきて、彼は暗やみの中でずっと神と格闘していきます。夜が明けたとき、彼はもう以前の彼ではありません。名前まで変えられてイスラエルと呼ばれるようになる。そうやって川を渡り、やがて兄と和解していくという経験をします。

またヨシュアもそうでした。彼は、モーセが亡くなった後にイスラエルのリーダーとなり約束の地を目指すのですが、ヨルダン川を渡る決心ができない。というのは、一旦川を渡れば後戻りできない。何か起きても逃げ場がないからです。そんなとき、川向こうにあるエリコという町にも神を信じて救いを

待つラハブがいるのを知ったとき、彼は川を渡り、約束の地に踏み出していきました。

ダビデと民たちも川を渡ります。どんなに危険に見えたとしても、救われるためにはそこを通っていくしかありません。

イエス・キリストを信じることは、このことに似ているように思います。できるならば川を渡りたくない。もっと安全でもっと快適な道があるのではと捜すかもしれません。その気持ちはわかります。けれども、フシャイは言いました。「ほんとうに、ぜひ、あちらへ渡って行かなければなりません。でないと、わざわいが降りかかるでしょう。」

2)いっしょにいる民がわざわいから救われるために

そのときフシャイは、二つ目のこととして、「王は民たちといっしょにいる」とも語りました。自分ひとりで渡るではありません。民たちはダビデといっしょに渡るのです。

主イエスは十字架につるされました。今日のダビデの姿になぞらえれば、真つ暗闇の川に入ったことと重なります。主イエスは、私たちが見ている目の前で死んでいかれたのですが、これも川のこと例えれば、この方が川でおぼれ死んだということになるでしょう。ところがこの方は三日目によみがえるのです。言い換えれば、川の向こう岸に無事に渡ることができたということになります。フシャイのことばで言えば、わざわいから逃れることができたということになります。

誰も渡ったことのない川であるのなら、ただ恐ろしいだけです。そんなところに救いがあるとは思われません。けれども、主がこの川を最初に渡ってくださったのならどうで

しょう。それも、主が向こう岸で休みながら、  
「おおい、こっちにおいで」と手招きして  
いるのではない。主がまず先に渡り、父の家  
で私たちの居場所を備えているのですが、不  
思議なことにいま主が私たちといっしょに  
渡るのです。

ここを渡るなら、あなたはもうわざわいは  
降りかかることはない。不安でおびえている  
私たちの手をしっかりと握ってくださり、主  
が先立って川を渡ってくださいます。